

教 昊 寺 2

1986年

安来市教育委員会

教　　昊　　寺

— 第二次発掘調査概報 —

1986年

安来市教育委員会

教 昊 寺

— 第二次発掘調査概報 —

1986年

安来市教育委員会

例　　言

1. 本書は、昭和60年10月1日から昭和61年3月18日まで、安来市教育委員会が国庫補助及び県費補助を得て、教吳寺跡推定地の発掘調査を実施した報告書である。
2. 調査にあたり以下の方々の指導を得た。

教吳寺発掘調査指導委員会

山本　清（島根大学名誉教授）
渡辺　貞幸（島根大学法文学部助教授）
門脇　等玄（安来市文化財保護委員）
勝部　昭（安来市文化財保護委員）

上原　真人（奈良国立文化財研究所）

永塚　太郎（島根県教育委員会文化課埋蔵文化財第一係長）
西尾　克巳（島根県教育委員会文化課埋蔵文化財第一係主事）
(順不同)

3. 本書の編集・執筆は、上記の方々の指導を得て、永見英が行なった。
4. 本書で使用した方位は磁北である。
5. 発掘調査で出土した遺物は安来市教育委員会で保管している。

(敬称略)

教吳寺発掘調査関係者一覧

調査主体　安来市教育委員会
地元協力　石倉利子　石倉マサ子　稻田喜美子　稻田貞子　稻田茂代　稻田輝子
　　　　　　稻田　勝　稻田蓉子　竹内静子　西田二三子　細田美代子　細田雪枝
　　　　　　吉田里子
協　　力　　稲田行雄　小村富夫　竹内千之
(アイウエオ順)
事務局　安来市教育委員会社会教育課
　　　　　　課長　青戸邦晃　係長　小西敏則
調査員　永見　英（安来市教育委員会社会教育課）
　　　　　　二岡教彦（安来市教育委員会文化財嘱託）

目 次

例 言

I章	はじめに	1
II章	調査概要	5
III章	検出した遺構	7
	1. 溝状遺構について	7
	2. 柱穴部について	7
IV章	出土遺物について	8
	1. 瓦について	8
	a. 軒丸瓦	8
	b. 軒平瓦	8
	c. 平瓦	8
	2. 須恵器について	8
V章	小結	10

挿図目次

第1図	遺跡位置図	1
第2図	地形測量図	
第3図	第4調査区平面図	
第4図	第3調査区平面図	5
第5図	第5調査区平面図	6
第6図	第3調査区上層図	
第7図	溝状遺構土層図	7
第8図	出土遺物実測図	9

図版目次

図版1	第4調査区
図版2	第4調査区
図版3	溝状遺構
図版4	第5調査区・第3調査区
	瓦出土状況
図版5	出土遺物
図版6	出土遺物

I 章　はじめに

教吳寺跡推定所在地の発掘調査は、昭和59年度から発掘調査を3カ年計画で実施しており、本年は2年度目の調査である。教吳寺跡推定地は、考古学的見地から大正10年以来、島根県安来市野方町周辺が有力地とされてきた。ここで、教吳寺跡推定地について、江戸時代からの説を紹介すると、「出雲國風土記」（以下「風土記」とする）の註釈書には「風土記鈔」、「風土記解」、「風土記考」がある。教吳寺については、註釈書として最も古いものとされる「風土記鈔」は、（天和3年（1683年）に記されている。この完本は現在、島根大学に所蔵されている。）間接的に上記の「風土記考」によると、推古天皇の時代に尊隆上人の開基とされ、その後、大同元年に、成縁上人が、寺号を清水寺とし改名、中興したとしている。「風土記考」は、これに対し清水寺が、推古天皇時代に尊隆上人開基とされることから、「其古昔此遠国なる出雲に寺建給ふ事はあるまじく思ふ」とし、そこから、清水寺が教吳寺とすることを否定している。しかし、所在地については言及はない。「風土記解」は、「風土記鈔」を受けて、「清水寺か」としている。これらの文献か



第1図 遺跡位罫図 (●)

ら、以前にも記したように江戸時代には教吳寺が所在していたことも人々からは忘れられていた状況であったと考えられる。大正時代になると、後藤藏四郎氏は、島根県安来市沢町字どいぞねで、布目瓦を表採したことから、この地が教吳寺であるとした。^(註2) 教吳寺の所在地について、考古学的な実証的方法による初めての所見であった。その後、断絶があり、昭和20年後半から山本清氏による研究が発表されるようになり、安来市野方町真ヶ崎周辺に寺院跡が所在するとされるようになった。その後、内田才氏、近藤正氏らの研究の蓄積があり現在に至っている。上記のとおり、実証学的方法が導入されて以来、教吳寺跡とされたのは、沢町字どいぞねと野方町字真ヶ崎であったことが分かる。

昭和60年度教吳寺跡発掘調査は、上記の研究史から、沢町字どいぞねと野方町字真ヶ崎の調査を、実施することとした。調査は、昭和60年10月1日から実施し、昭和61年3月18日に終了した。

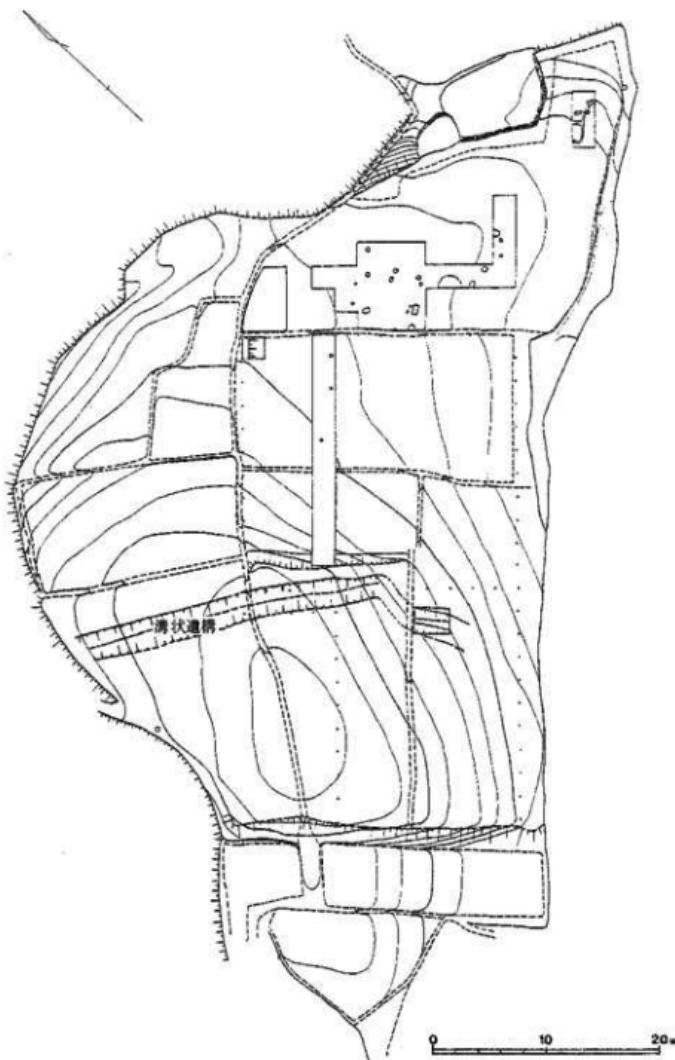
註1. 昭和59年度の教吳寺跡の発掘調査概報で江戸時代の註釈書である「出雲国風土記考」について「清水寺を教吳寺の有力候補」としているとしたがこれは事実誤認だったので、ここに記すものである。「出雲国風土記考」、「出雲國風土記解」の記述の検討については、前田敦氏にお願いした。記して感謝する。

註2. 「出雲国風土記考証」1925年

教冥寺跡周辺地形図



第2図 地形測量図



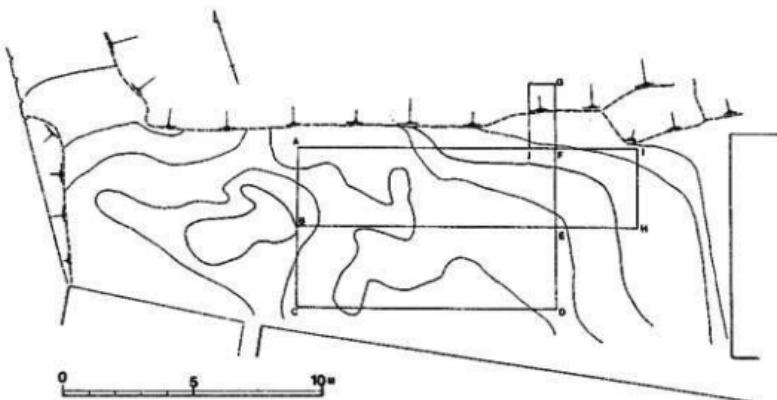
第3図 第 4 調査区

II 章 調査概要

今年度の教吳寺跡発掘調査は、野方町字真ヶ崎の空地（教吳寺跡発掘調査第3調査区）薬師堂境内と沢町字どいぞねの畑の3カ所で実施した。調査区は、野方町字真ヶ崎の薬師堂境内を第5調査区、沢町字どいぞねの畑を第4調査区とした。

第3調査区

第3調査区は、昭和59年度に3×10mの調査区の設定をした。昭和60年度は、この部分の南側に3×10mと東側に3×3mの調査区を設定して調査を実施した。前年度同様多数の瓦片が出上した。そして、瓦を包含する土層は、盛り土であることが明確になった。この盛り土の南北面は、ほぼ水平に見えるが、東西面は、東側から盛り始め、西側へと土を盛って行く。そのため、西側が東側より高い在り方を呈している。東西側土表面の盛り上の最上層に柱穴と考えられるものが、2つ確認されているが、前記のとおり西側が高くなっている。寺院などの建物を建立できる地形ではないと考えられる。そして、下層の各層の在り方も同様で、建物の建立が可能な面は確認できない。また、調査区内に設定した、2つの小トレンチで明確になった旧地表と考えられる部分についても同様であった。この盛り土の下の2次堆積でⅢ層の明黄灰色砂質土層から平瓦が出土している。今回の調査により第3調査区は本米、谷状を呈した地形であったことが明確になった。



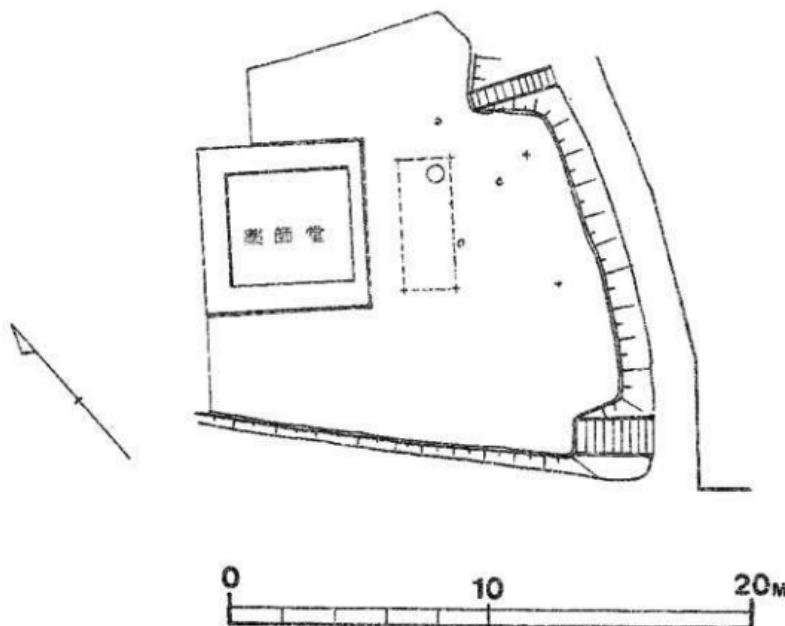
第4図 第3調査区平面図

第4調査区

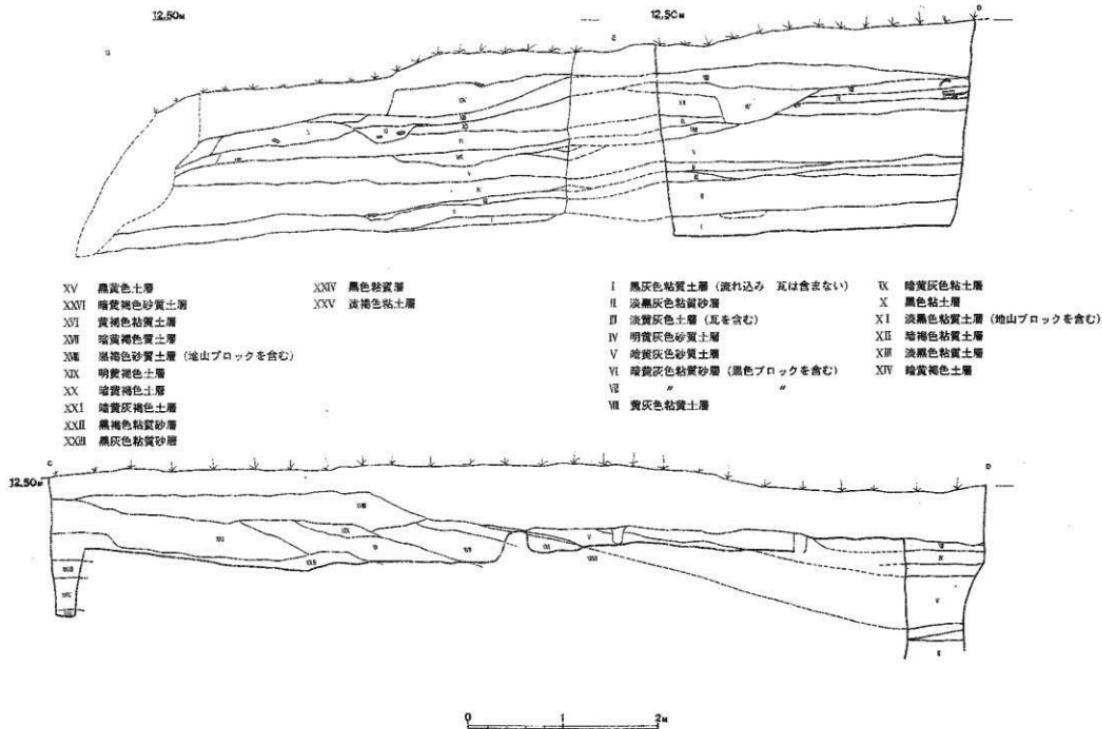
第4調査区は、すべて畠として利用されており、ほぼ全面にグリッドを設定した。この調査区は、畠により搅乱が著しいが、溝状遺構、柱穴、住居跡と考えられる遺構が検出された。特に溝状遺構は、どいぞねの丘陵を切り通すように作られた幅2.7m、深さ1mのV字形のものである。遺物については、溝状遺構から瓦片、須恵器片が出土している。

第5調査区

第5調査区は、薬師堂の境内である。186m²の発掘調査を実施したが、地表面は、すでに削られており、柱穴の痕跡と考えられるものもあるが明確でない。また、遺物についても検出することができなかった。



第5図 第5調査区平面図



第6図 第3調査区土層図

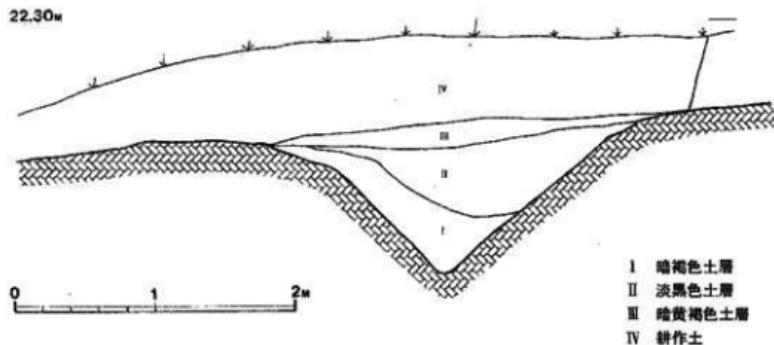
Ⅲ 章 検出した遺構

1. 溝状遺構について

第4調査区の南側から、溝状遺構を確認した。この遺構は、Eラインで幅約2.7m、深さ約1mで、H-114グリッド付近で屈曲している。この遺構は、全掘して確認してはいいないが、ボウリング棒による調査では、どいぞねの丘陵を切り通しているものと考えられる。溝断面はV字を呈している。溝状遺構の上層は3層に別れる。下層から暗褐色土層、淡黒褐色土層、暗黄褐色土層の順で堆積している。この遺構からは、瓦片や須恵器片が出土している。この遺構は、出土遺物から、中世の所産と考えられるが、性格その他のことにつき、今後明確にしていきたい。

2. 柱穴群について

第4調査区の北側からは、柱穴と考えられるものを検出した。しかし、建物になると考えられる配置を確認することはできなかった。いずれの柱穴も堅緻な暗黄褐色砂質土層である。これらの柱穴群から遺物は検出できなかった。そのため、時期については、明確ではないが、溝状遺構との関係が考えられる。



第7図 溝状遺構土層図

IV 章 出土遺物について

今年度の教吳寺跡発掘調査では、瓦片、須恵器片、土師器片が出土している。その多くは、第3調査区から出土したものである。

1. 瓦について

a. 軒丸瓦

今年度の調査では、第3調査区のXII層において、教吳寺IIb型式軒丸瓦の単弁8葉蓮華文軒丸瓦（第8図1）が出土している。この瓦は、丸瓦の接合部分のみを、欠いた完形に近いものである。焼成は堅緻である。同調査区のV・VI層と考えられるところから、教吳寺I V型式軒丸瓦の単弁4葉蓮華文軒丸瓦（第8図2）が出土している。巾房の部分が完形で残り、その他の部分は、3分の1を留める破片である。焼成は堅緻である。出土した瓦は、いずれも、今まで知られている資料である。

b. 軒平瓦

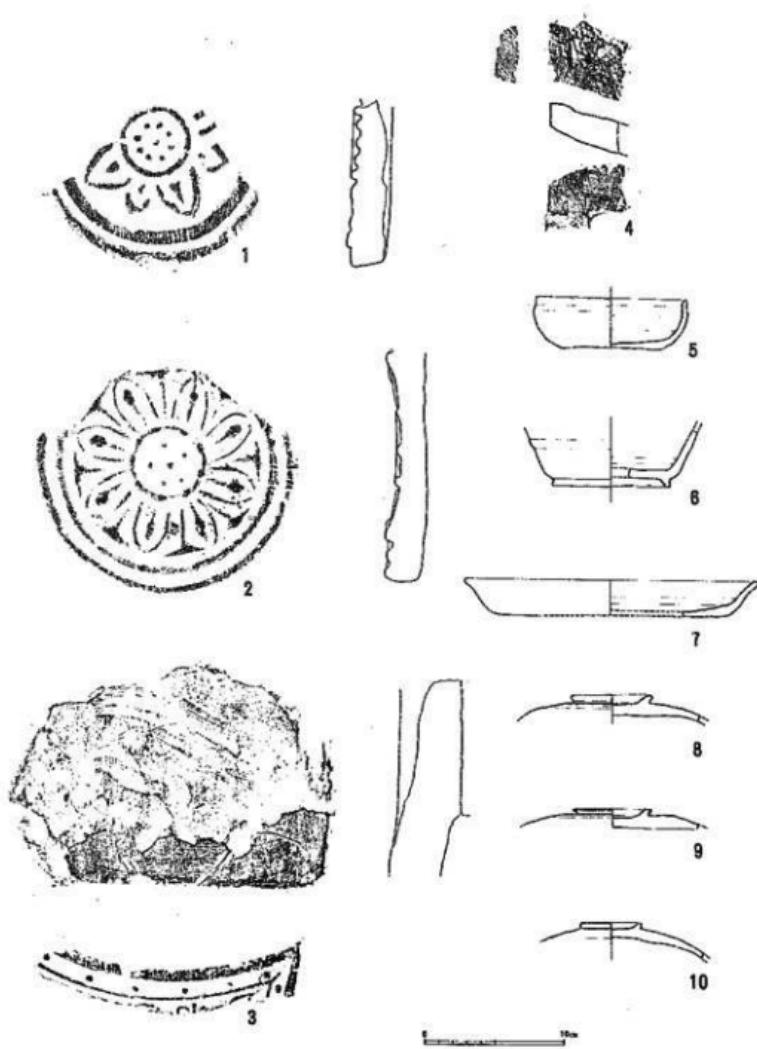
今年度の調査では、第3調査区のIX層において、教吳寺III型式軒平瓦の均整唐草文軒平瓦（第8図3）が出土している。額の形態は段額を呈する。焼成は堅緻である。

c. 平瓦（第8図4）

ここでは、第3調査区のIII層から検出された平瓦についてのみ記すものとする。凸面は格子叩き、凹面は布目痕が残っている。灰色を呈する、焼成は堅緻なものである。この瓦は、盛り土の下の2次堆積の土と考えられる明黄灰色砂質土層から出土した。

2. 須恵器

第3調査区のXV層から須恵器が出土している。第8図5は、坏で胴部は緩やかに内湾する。焼成は堅緻である。第8図6は高台付坏で胴部は直線的に外反する。焼成は堅緻である。第8図7は、皿で胴部は緩やかに外反する。焼成は堅緻である。いずれも、第3調査区のXII層の上の黒色土層から出土した。第8図8、9、10は、蓋で内面にかえりのある環状つまみが施される。焼成は堅緻である。第3調査区のII層から出土した。この層は、盛り土の下の2次堆積の土層と考えられる。



第8図 出土遺物

V 章 小 結

昭和60年度教吳寺跡発掘調査においても、寺院に関係すると考えられる遺構は検出できなかった。しかし、今回の調査によって、2つのことが明確になった。第1には、寺院が所在していた当時の地形は、現在の野方町字真ヶ崎の地形とはかなり違っていることである。周辺がどのようであったかは明確ではないが、第3調査区は谷状を呈しており、寺院の建立は考えられない地形である。第2は、第3調査区の谷状を呈している部分を埋め、地形を変える様な土木工事が、寺院伽藍の損壊後になされたと考えられることである。そして、その上の中に布目瓦が多量に含まれることから、寺院跡がかなり攪乱されているという推論も導かれる。

図版 1



第 4 調査区 近景



第 4 調査区

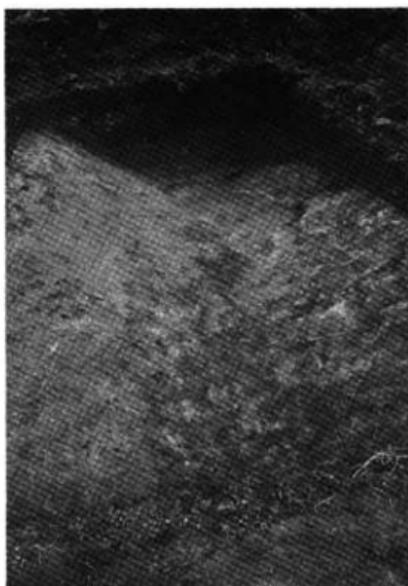
図版 2



第 4 調 査 区



第 4 調 査 区



溝 状 遺 構



溝 状 遺 構 断 面



第 5 調 査 区



第 3 調 査 区 瓦 出 土 状 況

図版 5



8 - 1



8 - 2



8 - 3



8 - 5



8 - 7



8 - 8



8 - 9



教 吳 寺 二

1986年

発行 安来市教育委員会

安来市安来町 878-1

印刷 有限会社 松浦印刷

安来市安来町 1,181